

隆瑜撰『五輪九字秘釈拾要記』の研究(3)

福田亮成

五輪九字秘釈拾要記第二

415/1

五大五輪六大法界等とは、以下の意を知らんと欲はば、則ち五行・五臓・六府・陰陽の配属、難經の説を知るべし。或る『記』に、難經の説は、左の如し。木火土金水の五行は、自然の天教、即ち陰陽なりと雖も、惣じて天に属する故に、俱に陽教となす。十干を開くは、陰陽の数を分つなり。又十二支は横なり。東南を陽となし、西北を陰とし、大に分つて陰陽の兩方なり。卯馬ウマトリネ酉子ウシの四を、東南西北の四方となし。其の間の寅辰巳未トラウミヒツジの四をして陽の四隅となす。又申戌亥丑サルイヌイウシの四隅を、陰の四隅となす。三四十二支、四方・八方なり。又是れ十二時なり。四方の陰陽は、天に対して横なることを以ての故に十二支を惣じて地に属して陰の数とす。地の数なるが故に、禽獸の名を立つるか。五声・六律・五行の配属等

上の例に准じて知るべし。而るに十二支に禽獣の名字を立てる事、『黄帝』其の祖と覚えたり。又外典難経等に、自然の理と云う。即ち密家の本有の名義に擬せるなり。

○肝の臓府は膽東木行

青春少陽数は七。官は將軍、惣じて勇健・怒氣を主る。或は謀慮脈筋を主る。又私に云う、肝は臣なり、心は主なり、心の氣薰作用に似て臓の事なる故に内五行空なり。

○肺の臓府は大腸西金行

白秋少陰聚は八葉白蓮事、陽氣柔弱にして陰冷の為に傷つけらる。惣じて鼻風皮毛を主る。

○心の臓府は小腸南火行

赤然太陽離の卦の事☲中空なり。官は君王統て氣力舌血脉を主る。

○腎臓の府は膀胱北水行

黒冬太陰坎の卦、十四推紅豆二粒の事なり。統て動揺作業、或は耳牙を☶。左粒は腎の蔵、右は原氣命門精の含する所、俗に子宮子坪と云う是れなり。

○脾の臓府は胃中央土行

中央黃色五臓の惣体は、統じて肉身・飲食・手足等を主る。

○心胞絡の臓

此の臓は難経の本説は名有るを形無し、臓と云。又滑伯仁が曰う、心の臓の上に別に其の形有り云。多く此の説を用う。

○三焦^{セウケイ}脛の府

三焦は府なり。脛なり。焦は赤色にして陽の脛に属す大なる腑なり。『素問全匱真言篇』に云う、王水が注に『正理論』を引いて曰く、三焦は名有りて形無し、午の心主に会す^{云。}又焦は俗に身のワタと訓ずる。或はコケクサシと訓ずる字なり^{云。}

○上焦 手の左の寸

同右の寸

心の臓小腸の府 大行
肺の臓大腸の府 金行

○中焦 手の左の關

同右の關

肝の臓膽の府 木行
脾の臓胃の府 土行

○下焦 手の左尺

同右尺

腎の臓膀胱の府 水行、命門を通ず
心胞絡の臓三焦と裏表火行

經の三十四難の下に曰う、「肝は魂を蔵す故に臓と云う。肺は魄を蔵す故に臓と云う。心は神を蔵す故に臓と云う。心神は精氣の化成なり。心は君王の官、肝は將軍の官、謀慮を主る^{云。}肝魂は心神の輔弼、肺魄は精氣の匡佐、脾は意と智を蔵す。脾は思なり、意は思の始め、智は思の終りなり。腎は精と志とを蔵す。故に臓と云う。腎は作業の官、伎藝の出る源なり。臓は各の其の体、所蔵は各の其の作用なり。」

又同『難』の下に曰う、「肝は青く、其の臭カ臊サウ木カの臭なり。其の味は酸味、其の声呼ヨハルなり。木の発昇する声なり、其の液エキハは木の竅アサヒタル、ウルヲイ。或は目に出るナンダ等なり。其の声言語にして、心の陽氣、大の造作に発する所なり。又其の液は汗等なり。心は血を生ず、即ち血液の漏るるなり。其の余の藏等の声と味と色と臭と液等各様にして出し披いて知るべし。繁なるか故に略す。今、『難經』の作者を按ずるに、源モと黃帝と妓伯の問答せる『素問靈樞』の中、八十一箇條の難解を周の末、秦越の人、箝鵠と云う神醫の決断せる言か。以上○五臟・六腑の主旨、或は六臟・六腑十二脛と云うなり。

五臟・五行・五大・五色・四季・四方・八卦・十干・十二支等の大旨并に密經の五輪・五大等の相連・相順なる甚深不二の秘義、図位を以て了解すべし。夫れ中央の脾土の臟とは、曆道に四季に分配するの土用。或は彼の和歌の五句は、即ち五行は中央の句を以て土行に配する等、凡そ天地人倫万物一切の迷情には十界依正・二報隔礙の別有りと雖も、皆な五行・五臟を出でず。五行は五大。五大・六大は、開合なるが故に、即ち六大法身法界体性を出でずと云う。故に宗の意は十界依正は、即ち是れ本有常住の不二一心の本源の蓮月なり記上。『五行大義』に、五行等を出す。上出と、大旨同なり。次下は便に随つて之を出すべし。

凡四丁を記、上に粗に之を記し難し。重ねて之を記せば、此の五字とは、是れ紙墨の字

『大正』三九・
六五一 c

416/2

『大正』一八・
二〇七 a

416/3

『大正』三九・
六五 c

に非ず。謂ゆる法性の文字なり。初の**𑖀**字本不生とは、凡そ口を開く初に、皆な阿の声有り。是を衆声之母となす。紙墨の**𑖀**字は、本不生の詮を説する故に、悉曇の阿字を亦た衆字之母となす。諸字、皆な爾り。此に則して知るべし。故に第七^{七十一}に云う「經に云う、謂く**𑖀**字門一切諸法本不生の故とは、阿字は是れ一切法教之本なり。凡そ最初に口を開くの音、皆な阿の声有り。若し阿の声を離るれば、則ち一切の言説無し。故に衆声之母となす。凡そ三界の語言は、皆な名に依る。而して名は字に依る。故に悉曇の阿字を衆字之母となす。応に知るべし、阿字門真実の義も、亦復是の如く、一切法義の中に遍ぜりと文。諸法本不生とは、是れ字義なり。諸法は三科法なり。本不生とは、八不の中に且く一義を挙ぐるなり。諸法の本性は、常恒不變にして破すべからず、壞すべからず、是を本不生と云う。故に『涅槃』に云う、「阿短とは不可破壊」と文。『教王經』に、「大日を称して、常恒三世一切身口意金剛如来と云う」と文。大日とは、**𑖀**字本初不生の体なる故に、常恒三世と云う。即ち不生不滅なり。又一切衆生の自性清淨心は、生死有るも滅せず。涅槃を証するも増せず、之を仏性と謂う」。故に『涅槃』^{品四相}「此の旨」云。『心要』に、法界体性智を明して、毘ルサナ真如法界智処中位と云う、毘ルサナとは、謂ゆる衆生の自性清淨心不生不滅の体なり。応に知るべし、本不生とは、即ち衆生自心の実際なり。故に第七^{七十一}に云う、「若し本不生際を見れば、即ち是れ実の如く自心を知る。実の如く自心を知るは、即ち是れ一切智々なり。故

に毘ルサナは、唯だ此の一字のみを以て真言となす」と文。此の文甚だ肝要、一經広しと雖も此の一句を出ること無し。故に今具に之を弁ぜば、本不生際とは、謂く自性清浄心なり。『初品疏』に云う、「本不生際とは、即ち自性清浄心なり、自性清浄心は、即ち阿字門なり、心、阿字門に入るを以ての故に為に知るべし、一切法悉く阿字門に入る」と文。自性清浄心とは、謂ゆる本具の^そ心なり。阿字門に入る故に此の心を証知す。故に本不生際を見ると云う。如実は、前劫の心外有相不如実の見到に簡う。第三劫の証知境界を指す故に如実と云う。知は謂く証知の故に、『疏』の中に、了了証知するを成菩提と名くと云う。又如実知とは、謂く能証の心なり。此の心、梵には^あと云う。自心とは、謂く所求の心なり。此の心、梵には^そと云う。此の由、第十二^群に具に釈有り、往いて知れ。入阿字門とは、謂ゆる無生忍なり、初地の菩薩は、心の本不生際を覺る。心自証心を、如実知自心と云う、之を入阿字門と謂う。即ち無生忍なり。又『捨尾口決』に云う、第七疏を引き畢つて云う、「故に經に説く所の如実知自心とは、本不生際を見る。本不生際を見るは為一切^{これ}智智なり。一切智智とは、即ち大日なり。故に真言教の即身成仏とは、本不生を見る」と文。即身成仏とは、此の教の実談不共の三昧なり、故に『菩提心論』に云う、「唯だ真言法の中にのみ即身成仏するが故に、是れ三摩地の法を説く」と文。三摩地とは、謂ゆる阿字本不生の觀なり。行者は如法に此の阿字門を觀想す、則ち心の本不生際を証して凡身を転ぜずして覺位を成ず。

『大正』三二・
五七四c
『大正』三九・
六四六b

五大 417/2

是を即身成仏と云う故に。『菩提心論』に云う、「父母所生の身に大覺の位を証す」。又第六^{三二}に云う、「我覺本不生とは、謂く自心は本従り以来不生なりと覺りぬれば、即ち是れ成仏なり、実には覺も無く、成も無し」と文。解して云く、『桧尾口決』に依れば、**阿**は是れ月輪、**ふ**は即ち、蓮花なり。**九**字は遍じて二心の種子となす。即ち二心不二の体なり。我覺とは、謂く**阿**本不生は、謂く**ふ**謂ゆる心自から心を証し、心自ら心を知る故に而実无成無覺と云う。是れ無我と雖も迷を転じて悟となす故に即是成仏と云う、即ち是れ即身成仏なり。**ア**字以下転釈上の如し。『阿字秘釈』中^{三二}に本不生の義の問答^云。『秘釈』第三^三の阿字十義^云、甚深なり。『秘釈』第一^{一五}に、『阿字秘釈』に遮表の義有り。表德の中に十義を明す肝要なり。同阿字觀の文。『遣教録』第一^{一六}に、『大日真言開題』同^{四十二}に『**ア**字秘事』、同^{七十五}**九**字觀の文。同第二^{丁七}『阿字月輪觀』、同第三^五『**九**字觀頌』。

【五大】とは、**九**字本不生とは、諸法本有の義。本有の源従り、故に常住不動にして堅固の德なり。此の堅固の德は、事に顯る時、堅固の地大と成る。又形に顯る時、堅住して傾無き方形と成る^上。五大は、地水火風空なり。『俱舍』の第一^{八九}に、大の義を明す、三義有り。『論』に云う、「体寬廣きが故に、或は地等の増盛聚の中に於て形相大なるが故に。或は種々大事の用を起すが故に」。『光記』一余^{三十三}に云う、「三義を以て大を釈す」。「一に体寬に約して大と名く。一々の所造の各に四大有り。二に相に約して大と名く。大地大山の如く地増益なり。

『定弘大全』
三・三九
『定弘大全』
一・一九
『大正』三九・
五八六b

大江大海は、水の増盛なり。炎爐猛燄は、火の増盛なり。黒風團風は、風の増盛なり。三に用に約して大と名く。水火風交は、其の次第の如く能く初二三定を壊し、地能く世界を任持するが如し、故に用大なり。又、『論』に云う、「業及び性の義を明して云う、此の四大種、能く何の業を成す。其の次第の如く、能く持と摂と熟と長との四業を成す^な。地界は能持し、水界は能摂し、火界は能熟し、風界は能長す。長は謂く増盛し。或は復流引し、業用既に爾り。自性云何ん、其の次第の如し。即ち堅・濕・煖・動を用いて性となす。地界は堅性、水界は濕性、火界は煖性、風界は動性、此は用て能く大種造色を引いて、其の相をして続生して余方に至らしむ。燈光を吹くが如く、故に名けて動とす。『品類足論』及び契經に、云何んが風界と名く。謂く輕等の動性なり。復た輕性を説いて所造の色となす故に、風界は動を自性となすべし。業を挙て体を顯すが故に亦輕と言う。具には『光記』に釈するが如し。今、秘經の中に五字を五大と名く故に。『声字義』に云う、「此の五大に顯密の二義を具す。顯の五大とは、常の釈の如し。密の五大とは、五字、五仏及び海会の諸尊是なり。『即身義』に云う、「彼の種子真言に曰く、**阿 吽 唵 嘛 呢 叭 彌 吽 薩 婆 訶**の^い為く阿字は諸法本不生の義とは、即ち是れ地大、嚩字離言説とは之を水大と謂う、清淨無垢塵とは是れ則ち字火大なり。因業不可得とは訶字門風大なり。等虚空とは欠字の字相即空大なり」。『疏』第一^四に云う、「阿字門を地となし、嚩字門を水となし、囉字門を火となし、訶字門を風となし佉字門を空と

『大正』三九・
七二七c

『大正』三九・
六二五a 418/1

なす。又世間の種子の地水火風を縁とし、虚空と礙えずして然して後に生ずることを得。随つて一縁も闕すれば、終に増長せず」と文。今、法性の五大を明す故に性業を論せず。若し縁起の五大に約せば、持等は是れ業なり。堅等は性なり。第十四^{五十一}に、「凡そ阿サリ、大悲胎藏を建立し、弟子を建立せんと欲する時は、先ず瑜伽に住して自身を觀ずべし。齋より以下は金剛輪に作すべし。其の色黄にして而も堅し。次に脐より以上は心に至つて水輪を作すべし。其れ白色なり。次に心より以上咽に至つて火輪を作すべし。其の色赤色なり。次に咽より以上頂に至るまで風輪と作すべし。其の色黒なり」と文。此の中に堅と云うは、是れ地の性、余は畧して明らかならず、又第四^{四九}に云う、「夫れ万タラとは是れ發生の義、今即ち名けて諸仏を發生して万タラとなすなり。菩提心の種子を一切智の心地の中に於て下して、潤すに大悲の水を以てし。大恵の日を以て鼓^うに大方便の風を以てし、礙えざるに大空を以てし、能く不思議法性の牙をして次第に滋長せしめ、乃至法界に満ちして仏樹王を成す故に發生を以て称^なとす」。堅・濕・煖・動、其の文分明なり、見るべし。又今^九等の五字名を五大となす。亦三義有り、經の第五字輪品に法門有り、遍一切處と名くと文。法性の五大、法界に周遍し、遍ぜざる處無きは、是れ体寛廣の義なり、五字を能造となす、山嶽大地は、阿字より成ずるは、是れ地の増盛。江河万流は、^ア字より出る、是れ水増盛なり。金玉珍宝は^イ字より出る、是れ火増盛なり。五穀五果は、^ウ字に依て成ずれば、風増盛なり。

り。端正相事は、欠字従り莊嚴するは、是れ空増盛なり。是れ相に約して大と名くなり。又 **ㄱ** 字は、菩提心の地を持し。**ㄴ** 字は、滋長して莖葉花果を成じ。**ㄷ** 字は、果を受用し。**ㄹ** 字は、無畏依・殊勝・決定の三心となり。**ㅁ** 字大空は、一切法に遍ず、礙えざるを用と為す、即ち是れ用大なり經上。風大地堅の徳とは、万法の所依と成り、諸法を任持する義なり。持の義とは、任持の義、独り堅体を以て其の功を施す。是れ皆な **ㄷ** 字本不生の源理、事法に在り、各々業用を成じ、一々の色相、一々の作業、法性の徳用ならざること無し。世間の事法の外に、法性有りと言はば、是れ謬見にして秘密の境界に非ざるなり。**ㄷ** 字水大とは、**ㄷ** 字は一切法離言説の義なり。離言の故に詮表すべからず。円形も亦執捉する所無きが故に、離言の法性、其の形を表の時アラハル、即ち円形と成る。又一切の言語は、口中に潤ひ無くんば音を生ずること能はざるが故に、内風息外風和合して入りて腎水を鼓ちて而も音声を生ず。故に言説の **ㄷ** 字の性は、是れ湿性なり、地乾くときは、則ち細塵ちりと成て飄散し。湿を得るとき、則ち摂収す。又言語は、必ず其の義を摂収する故に、摂するを其の用となすなり。又 **ㄷ** 字の形を亦円なり。之を思え。水の性も亦清浄にして、能く諸の穢を淨む。色を白とす、無染なり。彼此□節を合せたるが如し。又 **ㄷ** 字当体、即ち言説なるが故に、自体の外に言無し。是を無言説と云う。寂滅無言には非ざるなり。經に諸過得解脱とは、**ㄷ** 字の義、是れ離塵垢の法性は、猛利大勢の智火なり。謂く火性とは、熱氣勇猛にして諸法に亘り、利

縁不二の義なり。二体若し不二ならば、所生を待たず。因と縁と処に和合の義これ之有り。相応して一法を成ず。一法成し已んぬれば、因縁の二法相変せず。彼此変せず、即ち因縁不二の義なり。二体若し不二ならば、所生を待たず。因と縁と処に和合の義これ之有り。

合の法離散せしめるを徳となす。法の離散は、微塵は是れ極なり。今、此の極微は、即ち塵垢の体なり。諸の嚴淨、具に塵類に觸るれば垢穢と作す。㊦字塵垢の義なり。即ち火体なり。塵類本より垢穢なるが故に、此の外に垢有りて之を穢する物無し。是の如く能染所染を離れ、塵垢不可得の理と言うなり。是れを無垢と云い。垢を淨むる、則ち垢を破するなり。故に形を三角に表す、銳利之物は、能く物を穿き破する故に。又其の性を燻することは、焰盛なるときは則ち物を枯し、或は腐爛す。是れ能破の徳なり。又用を熟することは、之を爛たたらかす、則ち熟するが故なり。又燻とは、乾燥の義なり。寒氣、諸法を凝結す。若し燻氣に觸るれば、必ず離散す。是れ燻性の徳なり。又煩性至極なれば、熱氣と成り、熱氣其の精を吐けば、即ち是れ火大なり。熱とは濕育の義なり。諸法の生ずることとは、必ず水氣の聚集に依る。然も若し火爛無ければ壞して流注すべからず。此の故に燻氣を放つて其の体を壞せざるなり。㊦字門風大とは、遠離因縁の法性なり。風とは動の義、諸法の離合不定にして彼此移轉する、即ち風大の徳なり。是れ則ち万法の氣出現する形なり。地・水・火は、法体の上の徳なり、此の風大は業用を取る。法界体性の業にして縁起の用大の業に非ず。皆な是れ色心の諸法、因縁和合の成立する自性なり。因縁とは、二法相応して一法を成ず。一法成し已んぬれば、因縁の二法相変せず。彼此変せず、即ち因縁不二の義なり。二体若し不二ならば、所生を待たず。因と縁と処に和合の義これ之有り。

是を離因縁と云う。本有の因縁は不動にして而も動の故に。又此の字義、其の形を表はす時は、半月形となる。大刀の形なり、謂く半月形とは、上の一返は方なり、平坦安住形なり。是れ能生の地大なり。下の一返は、円にして不住の形、是れ所生水大なり。能生の因縁と所生の果法は、惣じて此の一字に含む。又此の半月は、至極動轉の形なり。何とならば、円は是れ動轉不住の相なりと雖も、唯だ動遍に局りて、不動に轉ぜず。今、半月は不動方而して動円、動即不動之形なるが故に自在なり。轉變して拘礙無きの表相なり。又此の因縁業果門には、一法生ずるときは、則ち必ず余法を陰没す。夫の水動ぜざるときは、則ち能く万象を現じ。若し動轉するときは、則ち衆もの影陰するが如きは、動の故に陰没す。無明之風動ずるときは、則ち不生の万徳、即時に陰没す、即ち此の義なり。是の故に其の色を黒に表はす。黒暗、能く一切を隱覆する故に。又因縁は、能く一切を長養す、故に風の用を長となす。又動とは、因縁生の義、分明なり。諸法、若し動轉すれば、劫て不動轉の義を成ず。喩は自心能く動ずれば、諸動生を生ずると雖も、常に中心に當つて而も移轉せざるが如し。風大の動も、亦以て爾なり。自体能く動じて、還つて群動を制し、皆な是れ因縁生の形音相応して、其の作業を成ずるなり。空大とは、大空なり。即ち諸色を尽し、諸相を含むなり。諸相を俱時に具足して偏一の相に非ず。諸相尽すと云うは、実に形色都絶して体性虚無には非ざるなり。即ち是れ戒字門等空不可得の理なり。等空とは、衆相具

419/3

五輪

419/4

『大正』一八・
四三c

『大正』三九・
七七四a

足して一縁に住せず、寂滅無為、是を空理と云うなり。此の字義とは、外に表せば団形なり。団形とは、方円不二衆形具足の形なり。上は三角、下は半月、二相合して団形となす。若し五相渉入すと見れば、即ち是れ方円不二の事なり。之に依て方・円・三角・半月・団形、具足円満すれば、即ち空輪なり。𠄎字等空の相、法性を称して此の形を顕すなり。無礙とは、衆徳輪円の徳業なり。若し縁増盛すれば、余法に於て礙有り。今已に衆相を含ずる故に、無障礙の義を成ず。皆な是れ空大の法性と相應して作業を作すなり。無障礙とは、彼の無礙に依て諸法に於て障を成ぜず。不障増長の縁と成りて万善を生長ぜしむ。皆な是れ空大の徳なり。又空大は直に字相を挙げる事、『即身義冠注』上_三右_十云、見るべし。

【五輪】とは、此の章次下_九に云う、「五輪は、頂輪・面輪・胸輪・腹輪・膝輪と名く。五輪に各々衆徳を具す故に名けて輪となす」と文。輪の梵は、万タラと云う。故に、『疏』の中に往々に方壇・円壇等と云う。壇は、即ち万タラの翻名なり。万タラ亦た輪円具足と翻す。五輪に各々衆徳を具す、即ち此の義なり。法性に本と五輪を具す故に、𠄎字形は方、𠄎字の形は円等なり、故に「百字成就持誦品」第六_{左十}に云う、「一切法本不生の故に、自然の形を顕す。或は不可得を以ての故に、嚩字形を現す」と文（自然形とは、謂く法性自爾の形なり）。第十九_{左六}に釈して云う、「此れ諸法本不生の故に自形を顕示すとは、自形は、即ち是れ阿字なり。○此の字能く種々_{種三形}色を生ず、謂く青黄赤白黒、乃至雜間、無量種及び種々の形有り。

『大正』三九・
七〇二c『大正』三九・
七二七c

謂く三角方円半月之類及び本尊等の無量の不同あり。若し此の中の真実之義を識ることは、
 体を挙て阿字門に入り、毘盧遮那に同ぜざること無し、上来所説の阿字門は、即ち是れ自
 身の大我を顕示す、即ち我が自身は本より不生にして、亦無滅なり。不生不滅は、即ち是
 れ如来之身なり。当に是の如く觀察すべし。故に阿字は自形を以て其の徳を顕示すと云う
 なり」と文。解して云う、「自形とは、謂く阿字方形は不生不滅の徳を顕す。是れ法性法爾
 の字形なるが故に、經に自然形と云うなり」。第十二_{左二}に云う、「前の阿字は是れ金剛万タラ
 なり。此の嚩の字は、名けて水万タラとなす。□_{地黄} 金剛 ○_{白なり} 水なり △_{赤なり} 火なり ▽_{黒なり} 風なり 空は定わる形
 無けれども而も種々色を現すのなり」と文。第十四_{右二}に云う、「復次に地輪は正方、水輪は円、
 火輪は三角、風輪は半月、最上の虚空は一点を作せ、其れ種々色なり。頂の十字_{十六、九九左}の縫その
 上に在て置くなり。(第十六_九に云う、阿字の上に点を加うると観じて、其の弟子の頂上の十字の縫
 の中に置くべし。当に知るべし、此_{十二}の上の点有るは即ち是れ甘露の法水を用いて其の頂を清むと文)。
 ○△○○□の義釈、此れ是の輪の形は正しく身分と相ひ称するなり。此_{種子を明す}の五位は、即ち是
 れ前に説く五字なり。方の中には阿字_アを置き、円の中には嚩字_ワを置き、三角の中には囉字_ラ
 を置き、半月の中には唵字_{オン}を置く。點の中に欠字_カを置く、更に前卷十一_{左二}の中を検すべし」
 と文。『尊勝破地獄軌』_{左三}に云う、「率都婆とは、方円三角半月団形、地水火風空、五大所成
 の故に」と文。此の五輪相合なるを称して率都婆と云う。即ち是れ毘盧遮那の三昧耶形にし

『大正』三九・
七二八b

420/2

『大正』三九・
七五六a
『大正』一八・
三〇b

『大正』三九・
六九四b

420/3

て法界体性智を表すなり。故に此の五輪を一切形の根本となす。自余の高下、廉細等の種々形相は、皆な是れ枝末なり。五輪の中に於て亦方・円を本となす。猶し阿字を余字の本とするが如し。方を梵に阿坭囉アチラと云う。即ち𑖀字の義なり。方には十方を具す。第十四右十三に十二真言釈に云う、𑖀𑖩𑖪は、謂く一切十方三世の一切時、一切方処に於て無尽法界を超越す。而して能く普門に一切を利益するなり。𑖀𑖩𑖪を亦遍一切処と云う。遍一切処とは、即ち十方なり。第十七右十九に云う、「此の阿字の法体は一切処に遍ずる故に、若し能く是の如く相応すれば、即ち毘ルサナ遍一切処に同ず」。又字輪品第五右初に云う、「法門有り、遍一切処と名く」と文。又上下を合して八方と成る。八方は即ち八葉蓮花なり。八を梵には𑖀と云う。即ち𑖀字の義なり。故に方壇の中に都て余形を具す。余形は皆な方よ従り出づ。何となれば、其の方形、四角を除去すれば、即ち円形となる。故に方に必ず円を具す。方は是れ円之本なり。又三角は、亦是れ方形の未なり。方を分つて二とするは、則ち三角と成る。□の故に、半月是れ円形之未なり。円を折て二となす。①は則ち半月と成る故に、土石中に火を含む。水中に風を具す。是れ法爾の理なり。当に知るべし後の三形は皆な方形従り出るなり。第十一右十二に四阿を釈して云う、「阿字より三字𑖀𑖩𑖪を出して四字を成す」と。即ち此の謂なり。是の故に方形は是れ一切形之本源なり。又方の中に円を容るるとは、四の三角を成す。円の中に角を容れば、三の半月を成す。𑖀。余形は皆な方より出づ、是れ天然之理

『大正』三九・
八一三c
『大正』三九・
七七四a

『大正』三九・
六四九b

421/1

420/4

なり。『即身義冠注』上。の十三丁左図を出す。「円、梵に嚩𑖀都囉と云う。𑖀𑖀字を体となす。又『義決』右十二に「𑖀字は法界の種なり、相形は円塔の如し」と文。円は即ち𑖀字の形なり。第十九右六に云う、「次に或は無所得の義なり。嚩字の形より不可得の義を顕示するとは、此の縛は本不生を証するを以てなり。嚩字の形を現するなり。此の縛は即ち是れ此の次下の文、言語道断の義なり」と文。解して云う、𑖀字の形は円なり。𑖀字を水となす。水の相は波なり。波の形は、自ら円なり。即ち法爾の形なり。円形とは、方面として得べく無く、何をか東と云い、何をか西と云う。故に嚩字の形より不可得の義を顕示すと云う。此の智に安住すれば、本不生も亦復また不可得なりと覺る。𑖀𑖀ボダ、此に覺と云う。覺は能覺の故に本不生を証すと云う。此の処は、唯独自明了にして余人の見えざる所、説として示すべきこと無し。故に言語道断の義と云うなり。三角とは、熾燃猛利の形なり。刀劍等の法、草木等を摧破す。即ち三角の形なり。諸法を分散して塵垢作業を成すなり。亦是れ火大及び𑖀字の義相応なり。法性に在ては離塵垢と名く。形色を出す。三角赤色、世間の火焰法爾にして而して角赤なり。明王の隆魔、偏に此の三摩地に在り。又𑖀字に、塵と無塵と到彼岸との三義を具す。『藏の第七。塵とは、生死の火なり。無塵とは、涅槃の火なり。到彼岸とは、生死涅槃無二平等不可得の義なり。三角即ち此の義を表すなり。前の三角は、方形より出づと。𑖀字は是れ金剛惠火の体。此れより𑖀字三角を出生す。三角は、即ち惠火の用なり。之に依て寂師、今の三角

—17—

半月等の相色相無し。応に約るべし、虚空は無相にして而も能く相を成就す。此の壇は種々の色を作すべし」と文。万タラは、翻じて円と云う。万タラとは、皆な悉く集会の義なり。無量の諸尊一々に聚集するを万タラとなす。即ち是れ団の義なり。団は普段なり、圓なり、聚なり、又團欒は円なり。又物の相聚の事、『疏』に円點と云う。即ち團形なり。又團形とは四形一処に具足する相なり。謂ゆる三角・半月和合して各々半出する形なり。△○
上は是れ三角
下は是れ半月なり。又二形合する、即ち是れ方円具足の形なり。何とならば三角は是れ方之二分、半月は是れ円の一分、故に四形具足し、俱時円備する、即ち空輪の形なり。色を釈する中に虚空を種々色々云う、即ち此の謂なり。夫れ人の一身の五輪に形るは法爾の率都婆なり。故は『涅槃』第八に云う、「亦衆生をして我身中に於て塔廟の想を起し、礼拝供養せしむ。是の如きの衆生は、我法身を以て帰依処となす」。然るに諸の衆生は、煩惱に所覆せられて自身塔婆なりと知ること能はず、是を以て毘ルサナ如来、大悲加持三昧に住して五字門を説いて、身分に布せしめ、雑染の五蘊を動ぜずして而も五分法身となる。五分法身とは、即ち是れ法界塔婆なり。五字門を以て一切字を撰す。故に五字身を嚴る、則ち万タラとなる。万タラとは五重の誓提なり。『經』第七年十八に云う、「本尊の瑜伽に住す。加するに五支の字を以てせよ。下体と及び齊の上と頂の眉間となり。三摩呬多に於て通相して安立すべし。是の法に依て住するを以て、即ち牟尼尊に同じ」。又左大に云う、「五字を以て身を嚴れば、威徳具に成就する。熾

『定弘大全』
五・二七

422/1

『定弘大全』
三・二三

『定弘大全』
四・五

『定弘大全』
五・二四

然たる大恵の炬^{トモシビ}、衆の罪業を滅除す。天魔尊衆等、及び余の障をなす者を、当に是の如くの人を見て、赫奕なること金剛に同ず」と文。又『藏記』本^{左七}に云う、「△□○□腰下に阿^ア字を念へ、是れ即ち地輪黄色なり。臍^{ヘリ}に卑^ヒ字を念ぜよ、水輪白色なり。胸に羅^ラ字を念ぜよ、日輪赤色なり。髮際に咩^ヤ字を念ぜよ、風輪黑色なり。頂上に劒^{ケン}字を念へ、虚空青色なり等」
見^{全文}るべし。応に知るべし、法性は本より五輪を具す、法性縁起して五輪の人体と成る。是を以て五字を以て身を嚴れば、縁起の当相は即ち毘^ヒルサナ法性身と成る、是れ五字嚴身の実義なり^{秘記}。『秘釈』第二^{三十九}、舍利供養式に塔婆の功德を讃ず、見るべし。又云う、「五輪即ち五部諸尊の釈」と文。又云う、五輪即ち五智^{と文}、又六大各々に六大を具すること『即身身冠注』上^{十四}具に弁ず、見るべし。六大法界^{とは}、凡そ十界の依正、皆な六大を以て体となす。諸法を撰するに色心の二法を出です。色法は前五大、心法は第六識大なり。是の故に『即身義』^{右九}に、「此の所生の法は、上、法身に達し、下、六道に及んで、麁細隔有り、大小差有りと雖も、然も猶を六大を出でざる故に、仏、六大を説いて法界体性となしたもう」と文、此の地水火風空識の六法各々に体性廣大にして法界に遍するが故に因と曰う。『大日経開題』一^{左三}に、「豎横無辺際^{の故に大なり}」と文。体とは、六大は四曼、三密の諸法の為には所依なるが故に体と云うなり。『秘藏記』上^{左五}に、法界体性智之体の字を釈して云う、「諸法の所依なるが故に体と曰う」と文。今、四字一句の故に体の字を略す意は同なり。下^{右三}に云う、「六

杲宝

(一三〇六)
(一三六二)『定弘大全』
三・三九

大は、普く諸の凡聖に遍じ、平等に成立して増減無し。一心は法身自性の仏、一体は報身受用身、一相は變化化身の仏、一用は平等等流身なり」と文。此の文の意なり。下の文を解す。『東聞』^{六十五}に云う、「四種法身の配立に二有り。一には能所合論の四身。二には所生の法に於て四身を建立す。初の義は、中台大日を自性身となす釈なり。四仏を受用身となす釈なり。釈迦を變化身となす。外部を等流身となす。即ち『秘藏記』及び『声字義』等の所説是れなり。後の義とは、大日を法界身となす。阿閼を自性身となす。宝生を自受用身となす。弥陀を他受用となす。釈迦を變化身となす。三十二尊を等流身となす。『礼懺經』等の意なり。又金剛界成身会の大日は、阿閼仏に同じ、即ち此の義なり。又上人は五種法身を立てる。即ち此の門の所撰なり云。今、六大法界も能造の六大なり。杲宝『秘抄』^{第一十二}に、下文を解して文処に至る。記すべし。此の六大位の種子^六（^六）^六、三形は方円等、顯色は黄白等、性徳は、堅濕等、業用は持撰等、是れ法性の具徳多具の六大なり。挙一全収の色法なり。『十界輪門』とは、十界とは『声字義』^六に云う、「十界とは、一には一切仏界、二には一切菩薩界、三には一切縁覺界、四には一切声聞界、五には一切天界、六には一切人界、七には一切阿修羅界、八には一切傍生界、九には一切餓鬼界、十には一切捺落迦界地獄なり。種々の界等は天鬼及び傍生趣の中には摂し尽す。『花嚴』及び、『金剛頂理趣釈經』に十界の文有り」と文。『記』に十界も三の廢立有り、一には六凡四聖、『声字義』に列名の

『大正』一九・
六〇七a

422/4

『定弘大全』
二・五

『定弘大全』
三・三九

『定弘大全』
四・九一

423/1

如し。二には五凡五聖、『花嚴經』第九、第十地の菩薩、光明所照の十界なれば、是れは天、修羅を合して一種となす。第十地の菩薩を開て別類となす。『釈經』に亦た五凡五聖なり。下に至て記すべし。三は三凡七聖の十界。『大日經』所説の十住心是れなり。〔界〕とは、差別の義なり。『研心』^{右九}に、界の字義を弁す。往見せよ。『釈經』^{丁初}に云う、「金剛加持とは、如来十真如、十法界、十如来地を表す。上下十峯金剛大空智処と成るを以て」と文。十真如とは十地所証之理なり。其の实体は唯だ是れ一ヶの阿字、不生之理なり。『唯識論』第十三^{右三}に十真如を明す、「十法界は即ち十界なり」之に付す。『秘要』^{左九}に三解有る中、第三義は五凡^{地獄餓鬼傍生人宮天宮、五聖^{声と縁と菩薩と一}道無為と}『十住心論』第一に出す所の十種の宮是れなり。『秘要』に正となす。何んとなれば、『声字義』^{右七}に、「『理趣釈經』に十界の文有り」と云う。正しく此の文を指す。『金剛頂開題』^{左廿四}に云う、「界に十種有り。十種の法界は是れ金剛万タラなり。十界の身相を聚て一ヶの金剛の万タラ身となす。故に界と云う」と文。十如来地とは、十地なり。又此の十真如等の三事は、是れ三密、三部、即ち金剛体の故に三密金剛と称す。『義決』^{左三十五}云。意の云う、「下の五峯は、衆生本有の五智を表す。上の五峯は、諸仏修生五智を表す。三密の金剛能く本有の五智を淨ずる、而して修生の五智を成ずる故に、此の五智は三輪より生ずる」と云う。『釈經』も同じ。『釈經拾要記』第一に『義決』の文を引く。具に弁ず、見るべし。

〔輪〕とは、万タラの義なり。『四万義』^{丁初}に云う、「古人は檀と翻じ、新人は輪円具足と翻ず」

『定弘大全』
三・三九
『定弘大全』
四・八

と文。十界輪円の万タラと^{為言}。之に依て□に出ず。図・種子は、六大種子。五形は、即ち三昧耶身の六大なり。種子法門は、法万タラ身。五仏は、是れ大万タラ身なり。今、此の字・印・形の三種は、共に法界体にして諸尊之惣躰なり。四万の中の字・印・形像は、此の三秘密身を以て本となす。是の故に六大能生の位の字・印・形の三種は、三種俱に惣体となり。又本源なり。然れども此の三種は不同にして同、不異にして異なるが故に、五大を挙ぐれば、即ち是れ五字・五仏の全体なり（六大法身題の中^{左七}に云う、「假令、蓮花の一挙れば一切三昧耶形挙して蓮花形なり。然れども諸相を壊せず。一字を挙れば、挙て一字なり。阿字を以て六大の字となす此の義なり）。五字を表れば、即ち又五大なり。五仏なり。又五仏の威儀に住すれば、必ず五大の本位に居する、相状之を帶し、仍て三種一躰として待対を離れるが故に、一法を挙げるに随つて全く諸法の所依と成る。之に依て三種有りと雖も、惣じて六大と名く。即ち是れ周遍法界の体性廣大の故に大名を立つ。然れども此の中に三徳宛然の故に各其の相を明す^{已上『東記』四。初主意なり}。此の説好し。『声字義』^{右六}に云う、「密の五大とは五字・五仏及び海会の諸尊是なり。五大の義とは『即身義』の中に釈するが如し」と文。又『大日経開題』一に云う、「阿等の字は、法界之体性なり^云。『聽聞集』^{覺々}云う、「能生の法界体性之位に三密・四万タの位有り。謂く^九等の六大是なり」と文。又、今図四万を出す。此の四万は六大法界之上、各々差別の相の故に、六大和合して成ずる所の諸法は、必ず此の四の差別有り。差別の種類は

万差と雖も、此の大・三・法・羯の四万を出でず。是の故に四種を挙げ、諸法を撰し尽す。『即身義』十右已下具に釈す、「凡そ六四三の法門を法数に約さば、寛より狭に至つて次第に建立して而も六大四万三密と云うなり。此の三大に就て諸法を尽すとき、六大の位輪円具足は、挙一全収の故に一相を挙げば諸相挙げて一相なり。然れども余相を廃するには非ず。余相之相を改めず、只一相なり。別相の四万の互に形対して差別するが如くには非ず。又四万の位の輪円具足は、十界の種子、三形、図形等各々に相對して而も互に無礙し、渉入し而も其の形相を改めざるは、喩えば帝網の如し。是の如きの微細幽遠の辺を牀大と名く。差別顯著の辺を相大と名く。此の十界の諸法業用發動する辺を用大と名く。若し爾らば体に約する十界の諸法をば、六大と名く。相を撰する義辺を相大と名く。業用の辺を用大と名く。今、十界輪円の言に、此の意を含むべし。四種万タとは、四万、三秘密身、両部に通ずるか。異義有る中に通じて正とす。即身文に云う、「字は法万等とは、字は即ち五十字門等なり。文字は即ち表顯を義とする故に、法万タラと名く。法は謂く軌持軌則、即ち物の解を生すべき故に、文字を以て法と名く。印は、謂く種々等、是れ印を以て三万を釈す。仏の弁シユ印契、皆な内証を事相に顯現するなり。形とは、謂く相好等、此れ大方なり。五大色を以て仏菩薩身を画く等なり。此の三種身等已下、羯摩なり。三種の万タラの上の動用の作業なり。羯摩別体有無の事、元瑜『記』に云弁云すべし。若依若し金剛頂經に依て等金剛頂等以下は、元瑜『記』に依て弁ぜよ。隆の云う、大方の下に五趣を図す、

是れ五聖五凡十界万タラとなすに似たり。按ずるに上の法三に隨う。何となれば法三も皆万タラ
大分は五仏即ち五智なり

な十界輪の故に、今は且く人に約して大万の下に於て之を図す。故に知んぬ。『即身義』に云う、「四種万タ、四種智印、其の数無量なり」と文。凡そ四種の万タは、十界に通ずる故に、迷語に隨つて廉細不同なり。而も其の体、本有なる故に、其の義同なり。故に十界各々に四万を具す。以て無数無量と云う。其の無量の四万、分量辺際有ること無し。故に虚空の無辺際に喩う。元々『記』に、十界四万の中、且く人に約して之を弁ずなり。弁ずるべきなり。問う、今、五凡五聖は十界の万タに就て、其の所抛之有るや。其の五趣を、五輪に配分する、何んぞや。答う、此の故に祖意測り難し。恐らくは此の『章』下右九下に云う、「**凡**字を迷本として苦を受けること、○迷悟已に在り、執無くして到る、余字も亦た然り」と文。此の釈は、『十住心論』第一冠註十右に云う、「則ち地獄・天堂、仏性・闡提、煩惱・菩提、生死・涅槃、辺邪・中正、空有・偏円、二乗・一乗、皆な是れ自心仏之名字なり。焉いづれをか捨て、焉いづれをか取らん。然りと雖も、秘号を知る者は、猶し鱗角の如く、自心に迷へる者は、既に牛毛に似たり。是の故に大慈、此の無量乗を説いて一切智に入らしむ。若し豎に論ずれば、則ち乗々差別して浅深なり。横に観ずれば則ち智々平等にして一味なり。惡平等の者は未得を得とし、不同を同とし、善差別の者は、分滴・不二にして、即離・不謬なり。之に迷う者は、業を以て命を夭し、之に達する者は業に因て仙を得る。迷悟已れに在れば、執無く

424/2

『大正』三九・
六五三 a

『定弘大全』
二・五

『定弘大全』
二・二一

『大正』一七・
二四四 取意の
文 424/3

して到る。有疾の菩薩、迷方の狂子、慎しなずんはあるべからず」と文。如実『冠註』に云う「則ち地獄等、此は八種離対を以て通じて上に明す所の九種の住宅を統べて、以て此の教、横平等の表徳の法門となすなり」と文。又是の如く等の深秘の釈をば開会の釈とも名く云。又云う、自心仏とは、謂く上に列したる所の八対は、即ち是れ自心本具の十界万タラの毘ルサナ仏なり。此は胎藏の四重法界円壇に当る故に。『疏』七に、「如来を亦は一切金剛菩薩と名く、乃至亦五逆邪見の人と名く。大悲万タラは正しく此の義を表すとなり」^{已云。上云。}又『冠註』^論右八に云う、「衆生の住宅に略して十処有り。一には地獄、二には餓鬼、三には傍生、四には人宮、五には天宮、六には声聞宮、七には縁覚宮、八には菩薩宮、九には一道無為宮、十には秘密万タラ金剛界宮」と文。此れ五凡、五聖の十界なり。然るに地獄、**凡**、方形等に配すること『論』^{冠註四十}一五右に云う、「次に五趣を明す。五趣とは三界に通ず。○三界の中に於て五趣有ること説かば、唯し欲界に於て四趣の全有り。三界に各々天趣の一分有り、云何んが五となす。体と名と是れ何ん^{いか}。謂く前の所説の地獄を傍生と鬼と及び人と天と是を五趣となす。○『冠註』^{四十}左に、「『正法念経』に云う、「上は地獄、中は餓鬼、下は畜生なり。此れ等の文に依り次第に建立す」と文。今、列次は経と前劫す。如実、弁じて云。今、大小乗の経論に依るに地獄・畜生・餓鬼の列次なり。此れ亦た罪の^{地獄水等}輕重に依る。如実、経に具に云、見るべし。又法万には**凡**と云、『五字口決抄』に云う、「『破地獄軌』^{右六}、之を以

て法身上品の悉地のために、流々此の真言を以て真となす。**𑖀**字は無点、後の四字は空点之を帶す。是の後の四字、皆な**𑖀**字の太空中生に帰する深義なり、尚更に問へ云。『印明決』空中云、上に引き畢んぬ。三万とは、方円等、上に記するが如し。凡そ五輪成身の觀は、五字を以て自身に觀布す、知るべし。然るに三形塔觀これ之有り。堀池僧正の云う、行者の胸の中に蓮花有り、八万に分つて廣大なること恒沙世界を過ぎ、無辺なること尽虚空界に越えたり。其の中心に**𑖀𑖀𑖀𑖀𑖀**の五字有り、變じて五大塔婆と成る。五凡・五道・五聖・五智の十界の種子を具す。真言を信修ぜざる衆生は、臨終の時、五凡の種子現するが故に中有の依正を開き、閻魔王宮を見、閻魔の斷罪に随い当來の五道生處に定む。修真言行者、臨終の時に五聖の種子を現する故に、密淨土の依正を現じ、三十七尊の法位に列し、自受法樂の臺に遊ぶ。此の五聖円滿の塔婆變じて大日如來の身と成る。五部八柱の樓閣の内に座し、七宝蓮花臺の上に大光明を放て法界を照し、其の光り月輪の如く、十方に遍じて自受法樂の秘法を説くこと三世に亘つて息む時無し。四方に四智の如來在す。前後に卅二菩薩圍繞す。内陣には四波の定妃有り、法樂を諸仏に進め。外陣に八供養天女有り、雲海に妙供を起す。金剛香菩薩は香を献ずれば、五分の異香虚空に遍じ。金剛花菩薩は花を捧げれば、七宝の妙花道場に散じ、六大無礙にして三身同じく相好を並べ、四万不離にして依正共に妙法を説く。○心数の諸尊も依正重々の三摩地觀あるべしや云。又云う、此の法身

の万タラ法爾の依正は、煩惱を断じて仏体を顕はすには非ず。行業に答へて浄土を成ずるに非ず。本来衆生性に備えたる浄土なり。深く此の理を信知して心を澄せば、臨終に此の浄土に皈入す。我等無始より以来、自心に此の理を備へながら、徒に五凡の種子を開き生死に輪廻す。今適^{かな}う此の理を聞くことを得て、速に五凡の迷を翻じて、臨終に五智の浄土に入るべし^云。此の説上出す。『十住心論』の五凡五聖なり。下の觀門、何れを治定せず。後時に考勘の為に因みに爰に之を記す。大万とは、此の得名に異義有り。『東記』七^上、問答決択の諸義未だ尽きず。『秘藏記私抄』^{大旨}「一義に云う、四万の得名は『四万義』に準ずるに、大・三の二種、所依の五大に従へて名を立つ。法・羯の二種は、当体に就て名を得る。諸ゆる大とは、地等の五大なり。若し図絵に約さば、黄白赤黒青の五大の顯色を以て人の尊体を図する故なり。若し真実に就かば、則ち五大所成なり、人体の故なり。実には四万俱に五大所成なれども、且く最初に約して唯だ此の一を以て所依の大従り名を立つるなり。又三昧耶をば、此に平等と云う。五大の色を以て情・非情に遍じて平等に画く故なり」と文。羯摩とは、此を翻じて業と為す。若し真実の自性会の諸の聖人の行住坐臥の四威儀の表業に約さば色是れなり。若し住持の影像に就かば、埴鑄木仏等の高下屈曲の事業の形色是れなり。大万と羯摩との住持は、俱に是れ人体なり。中に於て絵像等をば大万に配す。黄等の五大の色を以て図する故に。木像等をば羯摩となす。長短等の形色顯わ

る故なり。空輪二点肉髻とは、『法華玄贊』第五^{五十五}、『瑜伽』四十九^七に三十二相の文を出す。其の中、第三十一は、其の頂上に烏瑟膩沙^{ウシユニシヤ}を現ず。又此は頂骨なり。今、二点と云う、何に依る、未だ詳かならず、之を尋ねよ。諦忍の『閑窓雜錄』^{左四十}に云う、「如来の肉髻と云うもの。今時の仏絵師の輩、誤りを螺髻の半^ハに於て列の一つの赤玉の如くなる物を刻み画するは、大に非なり。京の三條誓願寺の如来、及び和州当麻万タラを見よ。件の小赤珠はなきなり。是を好標準^{スキテホ}とすべしと云。或る人云う、嵯峨釈迦尊像を写し披見致し候に、螺髻の中に一の赤き玉の如なるもの之有り。然らば今時画師の誤に非ず云、又今図は、**𑖀**一字、**𑖀**一字、或は五字通じて見えたり、下釈爾なり。行者に約す故に是の観心を示すなり、之何んが観ずるや。愚按ずるに、先づ種子を観ず。種子変じて三形と成る。三形変じて尊形と成るか。何となれば『秘釈』第九^{九十三}、『密嚴浄土畧観』に、種三尊の轉成の全ては大日なり。当に知るべし、今図も亦同なり、初に依正十界に明す。次に四万を明す、心此に在るか。然も今図に金台を示すこと、愚推するに是れ一重の深秘なり。教舜『両部合行秘次第道場観』に、先づ金の大日を観、種三尊転成し畢て、金の大日心月輪の中に種三尊を観ずる。是れ両部合行深観。秘すべし、秘すべし。今、此等の深意を含めて両部不二の万タラと云うか。且く風輪半月を以て両輪となし、火輪三角を以て金となし。水輪円を台となし、右等、相配相当の義未だ考えざるの請、之を尋決す。一切衆生等とは、九界を指すか。

色心とは、『即身義』^{丁九}に云う、「四大等心大を離れず、心色異なりと雖も、其の性即ち同なり。色即心、心即色無障無礙なり」と文。四大等不離等とは、喩は無熱池より流れて四大河となれども、未だ無熱池の水を離れず、四大等の色法亦復た是の如し。原六大の色を四大の色法とする故に、外別に心大を離れて四大等有らんや。色即心等とは、色は質礙を義となす。心は無礙を義となす。是の如き二義異なりと雖も俱に^{カサネ}躰て六大なる故に、其の体同一なり。『心月輪秘釈』^{丁九}に云う、「夫れ心理は色相を離れ、色相は心理に非すと云うは、知るべし、廉情遣迷之義なり。表徳顕実の義に非ず。○色相既に万徳を見ず。而して一如なり。何んぞ心理と名けず、心理亦六大を^{カサネ}躰て万種なり。豈に色相を離ること有らん。故に色に即して是れ心なり。性に即して是れ相なり」と文。之に依て当に知るべし、色心宛然として相違背せず。猶し雨足灯光の体相無量にして同水同火、其の体性齋等なるが如し。是を色即心、心即色と云うなり。又心法色形事、『艸子』第十^{丁九}一ヶ論なり。彼の答の義に云う、「色心不二の心法の上に色形有るべし。若し一法の心の上に形相無くんば、何を心法の色法の躰と成らんや。故に知んぬ、心法の色形も、不二一心の色形の体上の縁慮の故に而二の時的心法も縁慮の体に色形有るべきなり。若し縁声に色形無して云はば、色法は所依の本源、心法は所起の末。本源には色相有り、所起の心法には色相無し、故に顕乗の義に翻ずと云うは、自宗は色心俱に實際に居するが故に、全く能所・本末・能所生の義を存せず」云。

又云う、宗の意は、六大の廃立は、色は差別を本となす。故に開いて五大となす。心は平等を本となす。故に合して識大の一となす。若し五大之配立の時は、五大に識大を合して不二に約して輪塔と云う。若し爾らば、彼の色心の五大とは、色形を体となす故に、心の五大に色形無からんや。五大若し色に局り心に通せずとは、宗の源底、不二五大を本となす時、豈に台の一返に局りて金界を遯すべけんや。或は又一大を立つ是れ深義なるが故に教相談じ難し」云。『義決』丁廿二に「**大**字一大、之を出すの体大」。『東聞記』丁終。或は識大、或は火大、各々に自性を守り、法と位の住深秘なり。次の依正二種図は是なり。故に五大の配立は二、六大配立三而、一大は待絶。『遺教録』三丁卅四『灌頂一異義』に云う、「真言の深意は、殊に五輪を宗とす」と文。彼の『艸子』熟覽せよ。**実相**とは、宗の意は、本不生之義は、即ち実相の異名なり。『声字義』に云う、「謂ゆる法身とは、諸法本不生の義、即ち是れ実相なり」と文。『梔尾口決』に云う、「彼の阿字本不生の理は、是れ其の実相なり」と文。云何にして此の実相の理に入らん。第廿卷疑「若し行者、瑜伽の中に於て而も復能く是の如く觀察して、身口意之分別戲論を離るれば、即ち現前に真言の実相を証し、仏位に同きを得て、自体常住にして如来に同ぜん」と文。当に知るべし、実相とは、阿字本不生の理なることを。又実相とは、十界六塵に遍ず、即ち実相なり。実相とは、是れ真実無相の義、即ち是れ離相之相、相として具せざること無きの実相なり。

自身即成図とは、次下列する所の図、惣じて之を指すなり。何と

『定弘大全』
三・二二
『大正』三九・
七二七c

元瑜
(二七五六)
一八二云

『定弘大全』
二・三二〇

426/4

なれば器世間等も五輪所成、密嚴国土所住の土なるが故なり。世界依正等とは、『即身義』左七に、

秘密万タラ品の真言者円壇等の文を引く。『疏』十四下に之を釈して云う、「凡そ阿サリ、

大悲胎藏を建立し弟子を建立せんと欲はば、時に当に先に瑜伽に住して自身を觀すべし」と

文。即ち是れ五字嚴身觀なり。次に五大を以て身分に布する是れなり。宗家は、真言者は識

大となる。円壇を空大となし、惣じて六大と成る。『疏』と同ぜず。『疏』の意は、初の二

句は是れ惣なり。円壇とは、万タラなり。真言行者は、四重万タラを自身に觀布するなり。『顯

得抄』中に二点を挙ぐ。次に『即身義章』右三十三に依り、今の經文を解して正報となす。一義

云。瑜公、此の解を破して云う、今云う、爾からず。『疏』に依正の五輪を釈するに准ずる

に、依正合論するが故に次第に次ぐならず。謂く依執とは、下の空輪を挙げ、上の四輪を

顯す。正報には下の四輪を挙げ、上の空輪を示すなり。謂く依正互に顯はして而して報の

五輪の上に依り、正報の五輪を置く義なり。云。元瑜は、瑜公を破して正報とす。云。今は且

く瑜公に任じて、謂く依報は空風火水地と重立す。正報は地水火風空と重立す。下より、然るに最

初に空を觀するに、『冠註』上右四十四に二義有り。会合するに、即体離体之空輪弁を出す。此

れ『本東』五右七の意なり。対校して之を知れ。今図を按ずるに一々題に教相を談ぜず。或は

識大、或は火大等各々に自証を守る、法位に住する深秘の意なり。何となれば、『十住心論』

第十二冠註に、右七体文并に十二点を釈して云う、「一々の字門所具の五字、即ち各々の門能具の五仏・

五智^{所具法}なり。是の如く五仏其の教無量なり。五仏は即ち心王、余尊は即ち心数^{又八冠三十}と文。

に云う、「且く^九等の五轉に各本不生と、寂靜と、遍際と、不可得と等の義有り。又阿字に諸法性の義と、因の義と、果の義と、不二の義と、法身の義とあり、即ち是れ大日如來の種子真言なり。此の五転は、即ち五仏の種子真言なり。求上門に約すれば、則ち因行証入の方便なり」と文。其の余の四字、之に准ずべし。五轉・五仏の配釈は、第二十卷に見たり。是の如く深義を示す、知るべし。惣じて此の図は深義を示す、通途に非ず。未資等之を知れ。文段を消さんと欲せば、五色・五部・五智・五方等を弁ぜずんば、今章、無畏・不空傳、通じ難し。数多の故に。彼等を校せば、宗家『星供祭文』^{『法觀錄』四十六右}に云う、「謹んで追て諸天衆星等に啓す。夫れ以れば仏天は遙かに非ず、心中にして即ち近し。星宿は、外に無し、身を棄てて何をか求めん。之に依て己身之腑藏を明して、本尊之身土を顕す。謂ゆる心上の八分の肉団は、果中の万徳之星宿なり。八弁清淨之辺を、蓮花臺と名く。九重団円の分をば、満月輪と号す。只だ是れ一心の中に於て胎藏金剛之図を分ち、一体の上に於て素白・丹赤之名を立つ。然れば則ち中高辺輪は是れ心王心数之妙閣。中台隅葉は、亦自性眷属之道場なり。当に知るべし、五藏六腑の体相は、輪円五智之仏体、天円地方の身骨は、併て理智二界之万々なり。内には五智を証し、東西南中と号して光を和げ、外には五行を示し、仁義礼智信と号して物を利す。天には五星を顕し、東には歲星^{ケイコウ}、南には螢或、

『大正』一八・
二四〇b
『大正』一八・
二四〇b

『大正』三九・
六四三c

『大正』一八・
九a

427/4

427/3

西には大伯、北には辰星、中には鎮星是なり。地には五神を現す。左には青竜、右は白虎、前は朱雀、後は玄武、中は勾陳是れなり。然れば則ち五体不調を行ずとは、五行宮神祟を成す。五常軌則を守れば、天地の神靈恵を垂れ、是れ則ち天地に昇降無けれども円かに人倫に通ず。人物に上下なけれども、潜に陰陽に亘るの故なり。誠に三才各々自位に住し、五行同じく互融をせしめるものか」と文。全文見るべし。今、此を定量となし、之を校せり。近來、五神の異説紛々たり。故に先づ此を出すなり。又五色とは、色に二種有り。謂く形色、謂く顯色なり。五輪は是れ形色、此は即ち顯色なり。『宝窟』中_{未六}に云う、「色に二有り。一に資貞等の色、彼に槃泥と云う。二に青等の色、彼に留烏と云う。此に□と云う。此の方の色、彼の二色を翻す」と文。留烏は、恐くは増引_引跛の転声なり。槃泥は、是れ嚙_マ絹_キの転声ならん。夫れ五色とは、亦是れ法性法爾の顯色なり。故に『大日經』に云う、「彼の衆生界を染るに法界之味を以てし、古仏宣説する所、是を名けて色の義とす」と文、第六_三積して「法界不思議の色と云う」と文。法界、梵には_クと云う、翻じて法爾と云う。_{大疏}の_{見たり}。法性法爾に此の顯色を具して不生不滅なり。故に不思議と云う。不思議は即ち_九字の義なり_{第十六卷に}。『略出經』の第三_{丁四}に云う、「種々駄觀粉」と文。種々は、謂く五色なり。駄都は、即ち法界なり、即ち是れ法界之味なり。又『經』に云う、「五色の中に於て各字を想うて之を加う。白色の中に錢字を想著し、赤色の中に琰字を想図し、黄色の

『大正』一八・
五一b『大正』三九・
七〇二a

中に於て阿オ監字を想い、綠色中に於て覽字を想い、黑色の中に於て領字を想う。是の如き五字を各色の中に置き、已に彼に於て五種の如來の智を思惟す（一に謂う、法界性智）。応に知るべし、五色即ち五智なり。五智は即ち法界体性智、之を法界不思議の色と謂うなり。初に黄色とは、𑖀字地大の義。第十四に云う、「臍より已下は金剛輪を作るべし。其の色は黄にして堅し。夫れ黄色とは𑖀字大因陀羅金剛色なり」。第廿卷に此の中方壇とは、「梵に摩訶因陀羅と名く。是れ帝釈之別名なり。又則ち金剛輪の別名なり」。又云う、「方形にして色黄なり、即ち是れ金剛座を表すなり」。第十一に云う。「大因陀羅とは、此は是れ金剛中之極剛の者、能く金剛を破し、而して金剛は彼を破すあたわず。又是れ極黄色なり。紫磨金色の如し。此に阿字を想い、之をして金剛輪と名く。此の座の中に於て一切を思惟す。即ち是れ瑜伽之座なり。此れは是れ修行応理者之座処なり」云。又『經』第七に云う、「阿字金色に遍じて用いて金剛輪を作り、下体を加持して説いて瑜伽座と名く」と文。𑖀字本不生大菩提心に安住するを名けて、瑜伽座に住すとなす。是れ初発淨菩提心の義、即ち是れ謂ゆる増益の法門なり」。第十一六卅に云う、「凡そ一切増益の事、若し作さんと欲するときは、皆な此の座に坐す。増益亦円満と名く。謂く一切所願満ずるなり。若し秘釈せば、一月は是れ一見なり。若し見法を得て初地に入り、任運に一切三昧陀羅尼等及び諸の地位を増益するなり」と文、日の初めて出る時を黄色となす故に、増益の法門は東方に向い、諸方の中

428/2

428/3

『大正』三九
七〇二c

に於て東方を上となす。菩提心の最なる是れ万行之初なるに喩う。黄を梵に𑖀𑖄𑖅と云う。𑖀字は体となす。本体は是れ第一義空なり。三昧を帶する故に、即ち大空三昧なり。𑖀は𑖀と同じ。故に𑖀字地大、即ち大空の三昧なり。第十九^{左九}に云う、「此の中に於て空とは、謂く𑖀字なり。阿字は、即ち本不生不可得空なり。猶し此の畢竟不可得の不可得空にして、衆徳を具足し、一切仏法を攝すなり」。𑖄𑖅は是れ明淨の義、『花嚴大疏』六十六に、多羅幢城を釈して云う、「多羅と言うは、此に明淨と云う。幢とは建立なり。無着行は、般若淨明に依て勝行を立てることを表す故なり」と文。𑖄𑖅は、是れ般若の明淨の義。此を以て𑖀字大空三昧を助け、𑖀𑖄𑖅と云う。此は、黄と云う。即ち是れ阿字本不生不可得空の義を表す。此に証入するを称して初地淨菩提心と云う。故に黄色は即ち東方発心の義なり。黄を和訓して幾^キと云う。幾^キは金之略語^{キン}なり。次に白色とは、是れ𑖄字水大の色、大悲の義を表す。即ち息災の色なり。第十二^{左二}に云う、「次に縛字門を明す。即ち是れ上の嚧字なり。先づ其の体を明し、後に三昧之画を兼ねるなり。其の想法は此^キの字を想い純ち白と作し、猶し雪山及び牛乳等の鮮明皎潔なるが如し。先づ齋已上^{ライチ}に従て想と白蓮花を作せ。極白鮮明なり。嚧字の純白色なることを想い、白花の上^{タチ}に在て成就し已なば、即ち此の字を廻して以て本尊と作せ。此れは是れ息災之中最も第一となすなり」と文。白、梵に室制多^{サキ}(レクセイタ)と云う。𑖄𑖅息災の義を含む。又白を飽勞^キと云う、大悲の義を含む。𑖄𑖅𑖄𑖅は悲なり。

第五に三角の印を釈して云う、「白色は、是れ慈悲の義」。法菩薩の真言は **れまゐて** (一作なり)。

觀世音、如幻三昧に住して卅三身を現し、応に随つて化度す。之を一切作と謂う。即ち大悲事業なり。和訓に志呂シロと云う、是れ則ち **わ** (シリ) の轉声なり。 **わ** とは、謂ゆる大悲白

吉祥の義なり。故に觀音の眷属に七白吉祥有り、応に之を思ふべし。次に赤とは、**い** 字火大の色、大智降伏の義を表す。第十二年に云う、「次に囉字除障万タラを説く。除障の中に

於て最も第一真実之法となす。此の囉字は是れ赤中之赤、火中之火、焼中之焼なり。能く種々の煩惱業苦を焼滅す、乃至現に五無間罪を作るも、若し此の字門を修すれば、亦能く淨除

して余有ること無からしむ。既に罪已れば則ち諸の善功德を生ずるなり。此の字門の所作は不動明王と相応す。然るに不動明王の句は、能く三品息・増・降の一切、事を作るなり」と文。不動

明王相応とは、護摩の義を謂う。故に第十五左六に護摩を明す中に云う、「前に説く所の囉字を觀て周匝して火鬘あり。此を想い其の身に周遍せしめ。又刀及び索を持し、此の囉

字門を以ての故に諸業を尽し、諸障を淨除することを得。業障を淨め已れば白淨の種子を生ずるを得る」云。赤、梵に路ヲ咽ヲ多ヲと云う。**い** の字を体となす **ま** は、是れ火生三昧

(『義釈』に「不動真言の釈に見る」) 除障之体なり。 **わ** は、応に障の義を具すべし。除蓋障の真言に云う。 **あ**

は利益なり。一切衆生の蓋障を淨除すれば即ち是れ利益なり。除蓋障菩薩は南方に居す、種子 **あ** 字なり。即ち寂災護摩の種子と同なり。故に知んぬ、除蓋障とは即ち是れ護摩除障

『大正』三九・
六八一 a

『大正』三九・
七〇三 b

429/2

の義なり。不動尊火生三昧と同じ、所以に**アカ**赤色とは、即ち護摩除障の義なり。赤は、和には**アカ**阿加と云う、阿加は明なり、即ち火光なり。第廿卷に云う、「第四は赤日暉の如し。三角の中に住す。○世日の初て出る時、夜除て昼現じ、暗尽して明現するが如き故に此の色を取る」。阿加とは、応に是れ赤色の梵語なるべし。何んとなれば、翻梵語に云う、阿呼山、此に日と云うなり。三昧耶会の愛菩薩の真言に云う。**アハ**阿解アハ經に云う、一切諸仏を愛染すと文。愛染身色は赤、日暉の如き故に。阿加とは、是れ赤の梵語なり。次に黒色とは、**ク**字風大の色、大精進摂召の義を表す。第十二右四に云う、「訶字第一真実とは、是れ風万タラなり。○其の半月に大威徳威光之像有カタナり。黒焰外に遍く出でて、風之を吹動する幟幟を作せ。悪とは、謂く其の像、極忿怒之形を作す。云く是れ風輪之尊なり。降三世に非ず。其の形亦深青色(即ち黒の類なり)を作せ。若し此の成就を作し、能く一切衆生のために利義利を作す」と文。黒は梵に**ク**と云う、作業の義・大悲の義を具す。悲を**ク**と云う。大悲の作業は謂ゆる北方成所作智・善巧方便なり、又、**ク**字黒色とは、大涅槃の義なり。『涅槃經』に云う、「訶は心歡喜と名く。奇なるかな。世尊は一切行を離れたり。恠いかな、如来般涅槃に入る」と文。仏日は涅槃山に陰る。是を風輪黒色と云う。既に涅槃に入り大悲所催となして自ら住せず、生死界に遍じて大義を建立す。是を成所作智と云う。即ち是れ黒色、大寂中之事業なり。又涅槃とは、是れ文字の義(前に引く『涅槃經』の如し)。**ク**亦た字輪の義なり。

『大正』三九・
六四四b『大正』三九・
七〇三c『大正』一八・
二四〇b『大正』三九・
七八八b

謂ゆる **𑖀𑖩𑖱𑖨** 百字輪、即ち是れなり。夫れ **𑖀𑖩𑖱𑖨** 及び **𑖀𑖩𑖱𑖨** 字は、黒色涅槃の義なり。**𑖀𑖩𑖱𑖨** 字は、
 体文の初に居り。**𑖀𑖩𑖱𑖨** 字は、終に在り、此の二字を以て始終を貫通す。遍口の八字は、正し
 く涅槃を主る。謂ゆる八自在の義なり。其の廿五字は、涅槃なり。謂ゆる廿五三昧なり（『天
 台止観』に廿五有を配す）、廿五の三昧に住し。廿五有の衆生を度す。即ち是れ成所作智殺業
 黒色三昧なり。次に青色とは、**𑖀𑖩𑖱𑖨** 字大空の色なり。第六に云う、「青は是れ大空三昧の義」。
 青を梵に **𑖀𑖩𑖱𑖨** と云う、**𑖀𑖩𑖱𑖨** は是れ大空三昧なり。大空は無相にして相として得べきこと無し、
 故に **𑖀𑖩𑖱𑖨** 字を縁として虚空無相の義を顯はすなり。無相を以ての故に相として具せざること
 なし、故に虚空種々色と云う。第十二_{右五}に云う、「欠字門は、其の万タラに方・円・三角・
 半月等の相無し。当に知るべし、虚空は無相にして而して能く相を成ず。此の相は種々色
 に作す」。『略出經』第三、「五色の真言に唵縛日羅質多羅三昧耶_色」虚空蔵の真言に云う、
𑖀𑖩𑖱𑖨𑖨𑖨𑖨𑖨 種々奇妙顯色の義なり。即ち是れ五色なり、五色は即ち種々の色なり、以て毘ル
 サナ下轉方便を表す。第廿卷_{左二十八}に云う、「中心は空_{𑖀𑖩𑖱𑖨}にして一切色を具す、即ち是れ加持世
 界の万タラ普門之会なり。畢竟清淨にして有らざる所なきなり」。又入中の **𑖀𑖩𑖱𑖨** 字を釈して
 云う、「本誓を念じて大悲蔵を開示し、普く衆生を引いて仏恵に入らしめる故に、復た加持
 神力を以て普く身口意を現じ、生死界の中に遍満す。当に知るべし、此れ即ち是れ方便なり」。
 青を和訓に安_{アリ}於_{イロ}色と云う。安_{アリ}於_{イロ}は、恐くは淡之轉ならん。淡は、『字書』に音淡、濃に対す

南赤
西赤

中白
西白

430/1

るの称なり。又滔淡は水の満る事なり。即ち謂ゆる水色ミツなり。又青を楚羅色ソラと云う。阿修羅、此に非天と云う。𠬞𠬞は天なり。俗に虚空を天と云う。天の色、青なるが故に𠬞𠬞色と云う。又翠を𠬞𠬞文千と云う。即ち𠬞𠬞色なり。詩に彼の蒼とは天なり、天を指して蒼とも云う、即ち此の義なり私記。又寂師の云う、五色各二義を具す、知らざるべからず。初に白色の二義とは、第六十三に云う所の白は、是れ毘ルサナ浄法界色とは、是れ自性清浄の義なり。故に信の色となす。謂ゆる白净信心なり。此の信、梵に𠬞𠬞と云う。即ち白の義を具す。其の種は𠬞字なり、𠬞字は、即ち浄法界の義。『観智軌』に見えたり。梵語は応に是れ𠬞文千なるべし。即ち本浄の義を具するなり。『守護』第二に、東方地大を白色となす。即ち此の義なり。是れ中因の大日なり。又西方を白色とするに、是れ水大なり、大悲の義なり。亦即ち𠬞字の義なり。第五十八に、三角仏心印を釈して云う、鮮白は是れ大悲の色と是れなり。梵語は応に是れ𠬞第六の疏。此に悲の義を具す。𠬞𠬞は、悲なり。赤色の二義とは、赤は南方降伏の色となす。是れ𠬞字降障の義なり。梵語は応に是れ𠬞第六なるべし。即ち𠬞字門火生三昧なり、三角降伏の義なり。此に亦二有り。東方を赤色となす。宝幢仏、初発浄菩提の義、其の色日暉の如し。即ち初発浄菩提心の義を表す。又南方を赤色となすは、是れ世間の五行、南方火大の義なり。第二十卷に、南方開敷花王を釈して云う、次の行は赤色は是れ火の義なり。第十四に、長ナガ行を行となす、行は即ち火輪なり。又西方を

赤色となす。是れ敬愛の義なり。謂ゆる紅^グ頗^ハ色なり。紅を梵に^{クニ}赤^ニと云う、東南青色と其の義大異なり。黄色の二義とは、東方を黄となし、阿字金剛の色なり。初発淨菩提心の義なり。『金剛頂』に、南方宝生尊を黄色とするは、是れ修行の義なり。又黄は即ち火なり。『略出經』に、黄の種子^イ字なり。『智度』第九^ハに、天の蓮花は青赤紅白なり。何を以て黄無きや。黄は、火に属す、水花の宜ずる所に非ざる故に。黄を^イと云う。^イと通困す。即ち火の義を具す。又中央を黄となす、是れ世の五行土を中となす義なり。青色の二義とは、『金剛頂』に、青色を東方となす。即ち是れ木氣發生の義なり。謂ゆる阿閼佉金剛堅固の菩提心なり。又西方を青色となす。是れ空の義、無量寿の太空智を表す。青は梵に^イと云う、即ち大空無相の義なり。黒色の二義とは、内には^イ字風大を黒となす。即ち涅槃の義なり。世間の五行は、水大を黒となす。陰氣闇冥の義を取り、黒を^イと云う。又^イと云う。^イは作なり。謂ゆる大寂涅槃、不空成就、方便作智を建立するなり。又種々色に二義有り。黒色を種々と云うは、謂く五色なり。後は必ず前を見するが故に。『守護經』に、北方を五色と云う是なり。又虚空を種々色と云う。但だ五方の正色のみに非ず。一切支末の間色を具す。五色交会して更に相を発暉して種々の色を出生す。是を普門万々無尽莊嚴之標相なり。第六^ハに云う、「世間の綵画は、五色に過ぎず、然も更に相涉^{タカ}して種々の深淺不同有り。巧恵の者、善く之を分布すれば、万像を出生して窮尽有ること無きが如く、

法界不思議の色も亦復是の如し。総じて之を言はば、五字門に過ぎず。然も亦更に相発揮して種々の差別智印を成ず。如来、普門の善巧を以て悲生万タラを図作し、乃至世間微塵数の随類之形を出生し、猶を窮尽せず^云。即ち此之謂なり^上。隆の云う、義門差別に依て如上の如く不同有り、怪しむことなかれ。

〈キーワード〉 五大、五輪、六大法界